病院待合室 広がる可能性

東京で関係者らシンポ

患者目線で活用策議論

「闘病記文庫」を設置／栄養士が助言

病院や診療所に計約30万カ所もある待合室をもっと活用できないかー。シンポジウム「待合室から医療を変えよう！」が3月下旬、東京都文京区の東京大で開かれた。主催は東京大公共政策大学院の自主的勉強会「待合室プロジェクト」（河内文雄代表）。全国から医療関係者や市民ら約300人が参加した。1日に数百万人が利用する待合室の可能性を見直すきっかけになる議論だった。

シンポジウム「待合室から医療を変えよう！」（3月24日、東京都文京区の東京大）

東大病院の設計に携わった岡本和彦東大工学部助教が「待合室は誰のもの？」と問う基調講演をした。大病院では診察などの合間に患者はひたすら待ち、探している。

岡本さんは「なぜ待つかは病院もラーメン屋も同じ」と例えた。開店前に並ぶ「出発待ち」、中に入ってから空席を探す「順番待ち」、やっと座れてからゆで上がりまでの「仕事待ち」と「待ち」の3要素を挙げた。

この「待ち」の効率化は難しい。病院は「予約なし」だと、開院前に患者の6割が来院して並び、ずっと混雑する。予約制で「待ち」時間は減り、電子化を導入すればさらにスムーズになる。

予約患者数を伝えるボードが置かれた大病院の入り口。待合室には多数の患者があふれていた

コンビニ200店

待合室の設計では効率より、大きな窓で採光するなどアメニティーが重視。1日に数千人の患者や家族が来る大病院もあり「有数の集客施設」といえる。全国の病院内のコンビニは200店を超えた。外部の市民も利用しやすいよう飲食できるフードコートや憩える中庭がある病院さえ出現し始めている。

待合室でスタッフが悩みの相談に応じるなど少しずつ改善が始まっている。岡本さんは「待合室は元気をもらう第2の診察室」とする見方を紹介した。「待合室をより豊かにするため建築家の側も努めたい」と語った。

患者の視点から医療情報を提供してきたのが研究グループ「健康情報棚プロジェクト」。代表の石井保志さんは「時間の余裕がある待合室は自ら病気のことを調べる場になる」と強調した。

患者は「苦痛がいつまで続くか」「生還は可能か」と不安でいっぱいになる。石井さんらは、病気ごとに分類した闘病記文庫を全国約150カ所に設けたりして、患者らが自由に学べるようにしてきた。「待合室の本棚をインテリアでなく、患者さんに役立つものに変身させよう」と訴えた。

複雑な大病院の待合室

- かくも長い待ち時間
- 患者は動き待たされる
- 半分以上は移動と待ち

受付 → 診療 → 検査 → 処置 → 会計 → 薬局

（岡本和彦東大助教による）

千葉県立東金病院（東金市）は「待合室の栄養士」を始めた。待合室や空いている診察室を使い、待ち時間に糖尿病患者一人一人に5～10分栄養指導を繰り返している。

同病院の管理栄養士の前田恵理さんは「短時間複数回、栄養指導を重ねたところ、9カ月で血糖値は下がった。待合室は管理栄養士の活動の場になる」と報告した。

見回りを要望

「患者の権利オンブズマン東京」の大山正夫さんは「看護師が時折見回り、具合の悪そうな患者に声をかけてくれるとよい。待合室の名前を思い切ってラウンジに変えたらどうか」と提言した。

待合室の実態調査の発表もあり、今後も研究会を続けるという。

「待合室を医療と社会を変える資源として再利用しよう」（河内代表）という姿勢は共感を得ていた。

(c) 中国新聞社 無断転載、複製及び頒布は禁止します。